

推薦の言葉

本書を、最初に拝見した際に、まず印象付けられたのは構成（総論、基礎編、実践編）と大きな見やすい写真が豊富で本文が読みやすい点である。また、根底に WHO の腫瘍分類を視野に入れている点も、これからの時代の先取りをした内容が伺えるのである。また多くの著者の方々も熟慮の末に選ばれた方々と考え、全員が意気投合して素晴らしい内容に仕上げている。すべて監修者の高い見識の現れであり、まず心よりの贅辞をお送りするものである。

内容は、I. 総論として、婦人科細胞診の変遷、基本知識（WHO 改訂に伴う概念・分類の変遷）、コルポスコピーの見方が述べられている。婦人科細胞診のこれまでの歴史を紐解き、過去から現在へ至る疾患概念の考え方を見つめなおす良い機会である。また、近年の WHO 改訂からみた細胞診断の在り方や普段馴染みの薄いコルポスコピーと異型上皮を関連付けた解説はよりの確な細胞診断へと繋がり、読者にとってもより理解が深まるであろう。

II. 基礎編では、外陰 子宮腔部・頸部として 20 病変を、子宮体部として 10 病変、卵巣として 9 病変を選んで解説され、多くの疾患について理解しやすいような配慮が伺える。WHO 2014 では、腺系の病変の診断・記載内容が大きく変わった。特に腺異形成、頸部腺癌については、2003 年 WHO 分類と比較してかなり整理された感がある。それを受けて、本書でも子宮頸部腺癌の記載項目が豊富であり、これに伴う細胞像の見方・考え方が重点的に述べられている。実際に細胞診を鏡検して、ある特定の疾患を念頭に置き本書を紐解くと、実に的確な解答あるいは示唆が得られると思われる。

III. 実践編として、II で述べられた 外陰 子宮腔部・頸部、子宮体部、卵巣での鑑別診断が主体となる。ここでも、我々がしばしば悩む病変が適格に選定されており、大型の美しい写真を使用した説明は、実に理解しやすく構成されている。更にまた、大きな特色として感じるのは、本書では基本的な記載および写真の供覧は Papanicolaou 染色であり、それを基本として細胞診をどのように見て、診断してゆくかのポリシーが微に入り細に入り徹底されている。核・細胞質および構成集団の特徴から、より実践的で且つ的確な鑑別診断へと導く術が随所で示され、これまでの教科書とは類をみない体裁となっている。免疫染色、分子病理の解説は必要最小限にし、「どこでも、いつでも」Papanicolaou 染色で正しい最適な細胞診の診断を提供できるよう配慮が行き届いている。現在において、この哲学を貫徹されたことは素晴らしいことである。このような斬新な構成により全体として統一のとれた教科書は、細胞診の基本的な事項を習得した細胞診検査士を目指す諸君、若手のみならず熟達した細胞検査士の方々および細胞病理医の諸兄弟にとって、極めて有用な「実践書」といえる。細胞診断の現場において本書がその役割を遺憾なく発揮して、我が国の細胞診断のレベル向上に貢献することが大いに期待される。

また、国際細胞学会 IAC においても、世界の各地域でこのような「わかり易い実践書」を渴望しているのが現状と思われる。本書が近い将来、英語は元より種々の言語に翻訳され各地域で活用されるよう心より願うものである。

国際医療福祉大学大学院特任教授、日本鋼管病院病理診断科部長

国際細胞学会 IAC 理事長 長村 義之